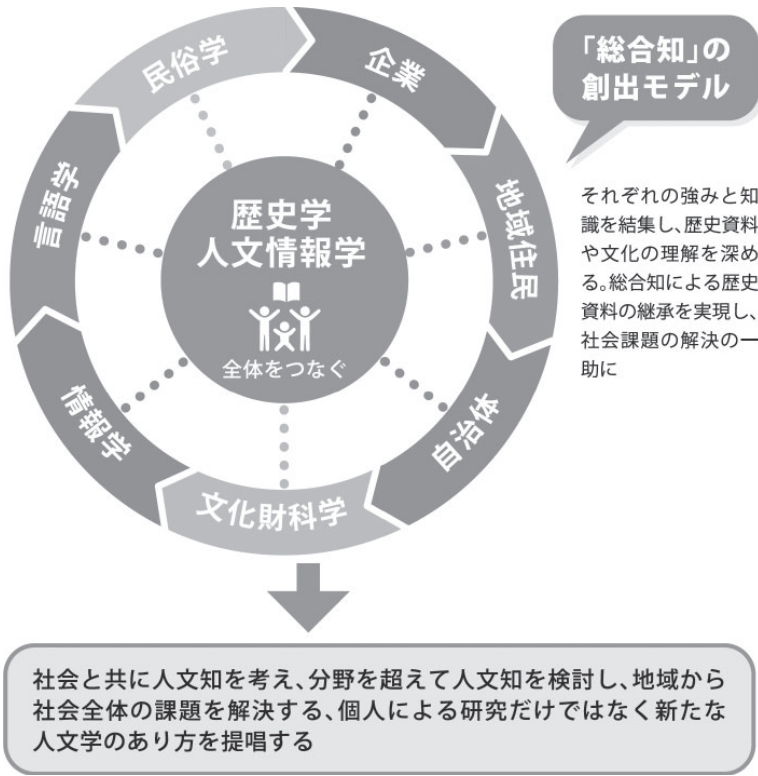


国立歴史民俗博物館の愉悅②①

デジタルヒューマニティーズと歴史学



国立歴史民俗博物館（以下、歴博）は、令和四年度から六年間の共同研究プロジェクト「日本歴史文化知の構築と歴史文化オンラインサイエンス研究」において、歴史学と情報学分野の融合研究を進めている。このような人文学に情報技術を応用した融合研究を「デジタルヒューマニティーズ」と呼ぶ。歴博では、とりわけ、高齢化・過疎化に伴う地域の歴史や文化が失われる危機に対応し、適切な歴史文化資料の継承を進めていくために情報技術を応用することを目指している。そのための歴史資料情報基盤が「Khirin (Knowledgebase of Historical Resources in Institutes)」である。Khirinは歴史資料の所在情報や目録、画像データ、テキストデータを国際標準の形で載せており、それらを国内外で閲覧・研究利用できるシステムである。このシステムを使い、歴史学以外の研

社会と共に人文知を考え、分野を超えて人文知を検討し、地域から社会全体の課題を解決する、個人による研究だけではなく新たな人文学のあり方を提唱する

究者や、地域の人々とともに地域資料を用いた研究と継承の活動を行っている。

デジタル化された歴史資料を、空間を超えて閲覧できるという点は、無論大きな利点である。加えて、データ化されるということは、歴史学以外の研究者も使うことができる可能性をも拓いているといえる。例えば、テキストデータがあれば、そこからコンピュータを用いて情報を抽出することで、これまでとは異なる分析を行うことも可能である。最近、とみに注目されるようになったAI技術を用いることで、これまでになかったような情報変換（翻訳）も行うことができ、日本の歴史資料を読むことが難しい海外の研究者も日本の地域歴史資料を使うことができるようになるかもしれない。

同時に、それは歴史学や人文学の位置を問い直すということにもなる。コンピュータができない人間が行う着想・発見などどのようなものかを考え直し、そこを洗練させていく機会ともなる。そして、人間が研究した結果として蓄積される歴史学の知識は「信頼できるデータ」として情報学における有益な学習データとなりうる可能性もあるであろう。

これからのデジタルヒューマニティーズは、単に「コンピュータを使う」という行為だけのものから、「コンピュータとともに研究をする」という関係へと変化しつつあるといえる。それはコンピュータに何かを奪われるのではなく、新たな研究の可能性を人文学にもたらす「仲間」が増えたのだということでもある。ただ、この「仲間」は、どちらの方向に向かうかわからない「仲間」でもあるので、人間の側でうまく方向づけてあげる必要がある。また、その方向とはどのようなものを人間は考えなければならぬ。歴博は地域歴史資料と文化の継承という目的を通じて、地域の多様な人々と仲間とともに、この新たな分野と立場を超えたチーム型歴史学（人文学）を作っていくことで、このデジタルヒューマニティーズの一翼を担っていくことになるだろう。

（国立歴史民俗博物館 研究部准教授 後藤真）